

均建築

KINKENCHIKU 2017

11

特集／奈良・京都の建築

日本建築史の歩み

若松均
木村舜
久保田祐基
迎田泰
小川麻菜
上出哲也
首藤智子
寺田通平

奈良駅	8:05

近鉄奈良駅	8:30

法隆寺	9:30

	11:00

昼食	

慈光院	12:30

	13:00

薬師寺	13:30

	14:10

唐招提寺	14:20

	15:00

東大寺	15:30

	16:30

京都	18:00
五条パラディソ	

東大寺
500円

唐招提寺
600円

薬師寺
1100円

慈光院
1000円

法隆寺
1500円



五条パラディソ	7:30

朝食	

東福寺	8:30
	11:00

昼食	

妙義庵待庵	12:50
	13:20

三十三間堂	14:30
	16:00

ロームシアター京都	16:30
	17:30

京都国立博物館	18:00
	20:00

夕食	

五条パラディソ	



ロームシアター京都

西本願寺

京都国立博物館
1200 円

東福寺
400 円

三十三間堂

妙義庵待庵
1000 円

五条パラディソ	7:30

朝食	

京都駅 (バス停)	8:04
	8:25

桂離宮	8:45
	12:00

昼食	

聴竹居	13:50
	14:40

山崎蒸留所	14:50
	15:30

大山崎山荘美術館	16:00
	17:00

夕食・解散	



慈光院(1663)



1663年（寛文3年）小泉藩主片桐石見守貞昌が、父貞隆と母の菩提寺として建立した。

寺としてよりも境内全体が一つの茶席として造られており、表の門や建物までの道・座敷や庭園、そして露地を通して小間の席という茶の湯で人を招く場合に必要な場所ひと揃え全部が、一人の演出そのまま三百年を越えて眼にすることができるということは、全国的に見ても貴重な場所となっている。

書院は農家風の外観をもつ慈光院の中心的な建物。入母屋造茅葺屋根に棧瓦の庇をめぐらし、十三畳の上の間と、中の間、下の間からなる。上の間には床・付書院を備えているものの、長押は省かれ、簡素で軽やかな意匠である。また全体に天井や鴨居の高さを低くしており、座ったときに安らぎや落ち着きが出るよう熟慮されている。奈良盆地の眺望が素晴らしいことでも名高い。北側には三畳逆勝手の閑茶室がある。

書院の東側の庭と茶室の庭が続いているのだが、開放的な書院の庭と、今は一部しか残っていない築地塀で囲われた茶庭とはっきり性格が変えられていて、竹垣で区切られている。

ロームシアター京都(2016)



1960年に全国に先駆けた多目的な公立文化ホールとして、京都・岡崎の地に誕生した京都会館を2011年に「京都会館再整備基本計画」を策定し、それをもとに2016年にロームシアター京都として生まれ変わりました。

京都会館の設計者は前川國男であり、戦後の日本近代建築の代表作である。捲れ上がる大庇、それを支える鉄筋コンクリートラーメン構造の柱梁、水平に走る軒と緑等々の特徴ある意匠は、ル・コルビュジエを範としつつ、岡崎地域の周辺環境との調和を考慮し、水平線を強く意識した意匠で設計されており、日本建築学会賞を受賞するなど、「モダニズム建築の傑作」として高い評価を受けました。

改修のきっかけは施設全般の老朽化やホール機能の劣化など、利用者や来場者の要望に応えられない状況となり、京都市では2002年の耐震調査から10年近くにわたり検討を重ね、2011年に「京都会館再整備基本計画」を策定した。

今回の改修は、主に既存改修、増築、建て替えの3つに分類される。メインホールは、第一ホールを新しく建て替えたものだが、建物の特質を保存し既存部分との調和を保つため、外壁や大庇等の要素を忠実に復元した。旧来の第一ホール外郭から奥行・幅を変更することなく、客席数を確保するため、客席を5層に積み上げた。

中庭に沿ってこれまで外部だったテラスをガラスで囲み内部化。これにより二条通からピロティ、中庭、冷泉通へと続く、南北軸の空間の抜けを明確にした。

既存コンクリートやプレキャストコンクリートは、原型を保ちつつ洗浄・修復を施すと共に、大庇軒下の空色も竣工当初の色を復元した。

薬師寺



薬師寺は「法相宗 [ほっそうしゅう]」の大本山です。天武天皇により発願（680）、持統天皇によって本尊開眼（697）、更に文武天皇の御代に至り、飛鳥の地において堂宇の完成を見ました。その後、平城遷都（710）に伴い現在地に移されたものです。（718）

平成10年よりユネスコ世界遺産に登録されている。

法相宗の宗旨としては、唐でできたものですが、そのもとは印度の弥勒菩薩 [みろくぼさつ]、無着菩薩 [むちゃくぼさつ]、世親菩薩 [せしんぼさつ] によって大成され、護法菩薩 [ごほうぼさつ] 等によって発展した唯識教学です。

天武九年（680）に天武天皇の皇后が病気になられた。苦難を共に乗り越えてきた最愛の妻である皇后の病気の全快を祈念し、建てたのが薬師寺である。皇后の病気は治ったが、かわって天皇が病気になる、薬師寺伽藍を完成しないうちに死んでしまった。その後、妻が旦那のあとを継ぎ、薬師寺伽藍を完成させた。発願より十八年の歳月が費やされた。

見どころ！

新しくなった食堂

食堂は僧侶が齋食をするための建物で、僧侶約300人が一堂に会する規模であったと発掘調査により判明している。その規模は、東大寺、大安寺に次ぐ大きさとされている。

新たに復興した食堂は、建物外観は奈良時代の意匠を凝らした作りとし、内部は現代技術を活用することで広い空間を確保し、食堂を多目的に利用することを想定している。堂内には田淵俊夫画伯により描かれた食堂ご本尊「阿弥陀三尊浄土図」を中心に、全長約50メートルにわたる壁画が奉納される。

東塔 西塔

各重に裳階のある三重塔として、また水煙の意匠や檼（心柱）に陰刻された銘文などにおいてもよく知られた有名な古塔。構造形式は三重塔婆、各重裳階付、本瓦葺である。高さは、五重の塔ほどあり、それぞれの重に裳階があるので屋根は六重となる。今見えている各重の裳階は初重が五間、二・三重が三間でいずれも柱間は白壁で窓がない。しかし、元は連子窓が造られていた痕があり、復興西塔には窓がつけられている。



唐招提寺

唐招提寺について

- 759年 唐招提寺 建立
- 唐招提寺(とうしょうだいじ)は、奈良市五条町にある鑑真が建立した寺院。南都六宗の1つである律宗の総本山である。
- 本尊(信仰の対象として最も尊重されている中心的な仏像)は廬舎那仏。開基(創立者)は鑑真である。中国・唐出身の僧鑑真が晩年を過ごした寺であり、奈良時代建立の金堂、講堂を始め、多くの文化財を有する。
- 唐招提寺は1998年に古都奈良の文化財の一部として、ユネスコより世界遺産に登録されている。
- 数多くの、国宝・重要文化財が収容されている。

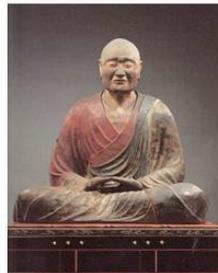
唐招提寺の歴史

- 唐招提寺は唐僧・鑑真が天平宝字3年(759年)、新田部親王(天武天皇第7皇子)の旧宅跡を朝廷から譲り受け、寺としたものである。
- 鑑真がこの地にお寺を建立したのは、土が甘かったからと言われている。(甘と尼辻)

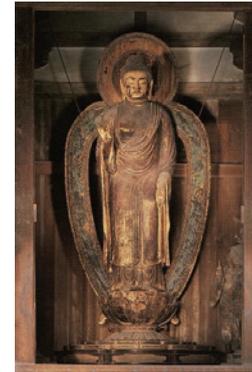
名前の由来・・・鑑真のためのお寺



唐招提寺金堂



薬師寺如来立像



・大略を木造で作し、それを心部にした木心乾漆の像である。

・高さ 369.7厘

・唐招提寺や千手観音像等の制作時期が異なるとされ、全体のモデリングがかなり形式化されており、張りとか強さに欠ける。

千手観音菩薩像



・人々を救う慈悲の神様

高さ 535.7厘

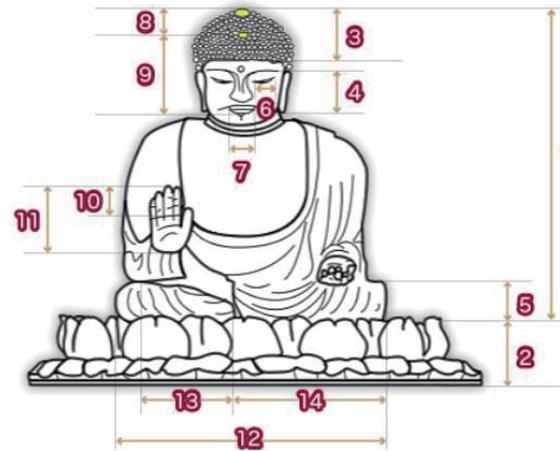
唐招提寺の千手観音菩薩像は911本手がある。



九つの
国宝寺院



大仏様の各部分の長さ



1. 14m98cm
 2. 252~258cm
 4. 2m54cm
 5. 2m33cm
 6. 1m2cm
 7. 1m33cm
 9. 5m33cm
 10. 1m8cm
 11. 1m48cm
- 顔の横幅 3m20cm
鼻の高さ 50cm
足の大きさ 3m74cm
銅座の高さ 3m4cm



金銅八角登龍

高さ 4.5mの登龍
奈良時代に作られたものが現存している



如意輪観音坐像

虚空蔵菩薩坐像

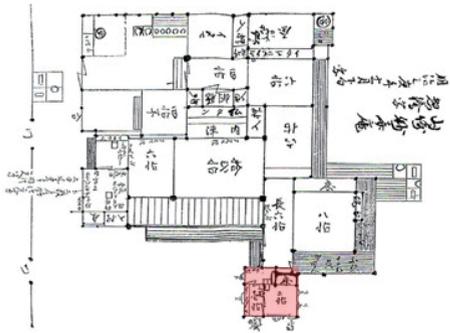
広目天立像

多聞天立像

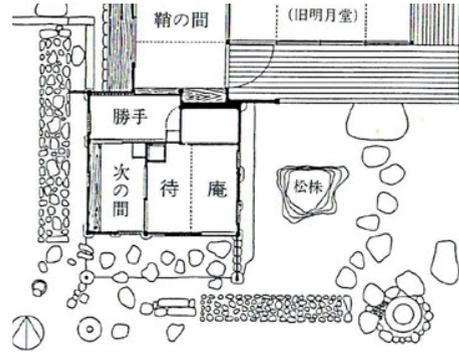
妙喜庵 待庵 (1581年)

< 日本最古、唯一残る千利休の茶室 >

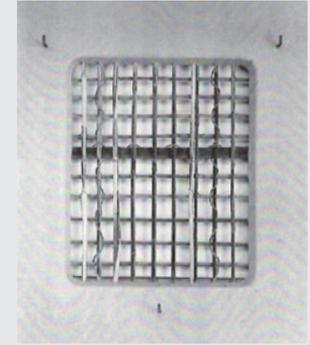
位置図



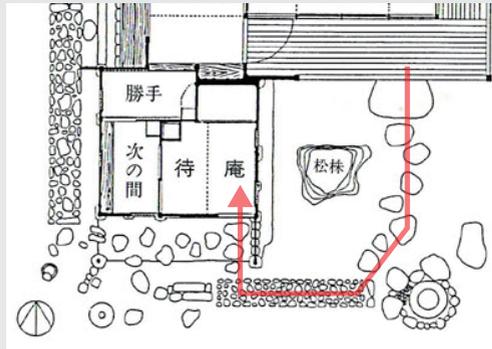
間取り図



3. 下地窓 明かりの濃淡をつくり出す



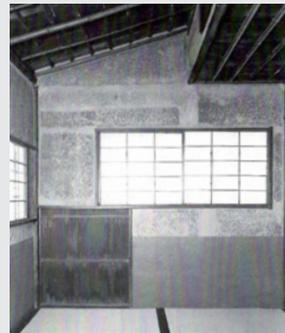
1. 露地 一重露地と呼ばれる最も単純な露地



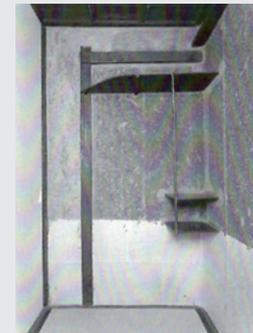
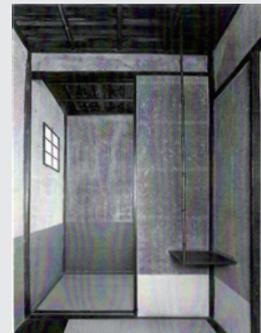
4. 柱の塗廻 狭い床の空間をより雄大な広がり



2. 躡口 世俗性、日常性を超脱する関門



5. 棚 白竹で釣られた桐板



11/18 12:50~
拝観料：1000円

桂離宮



■外腰掛

松琴亭での茶事の際に待合所として使われた。右側に広がる苑路に導くような設えた。



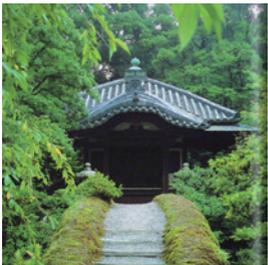
■松琴亭

桂離宮の茶屋の中でもっとも古い。茅葺きやこけら葺きなど異なる素材や形の屋根が重なりあう。



■賞花亭

飛び石をたどり山を登った所に峠の茶屋のように現れる。中央の竈を囲うような吹放しの畳座がある。



■園林堂

桂離宮創建当時からの建物ではなく、他の建物とは著しく意匠が異なる。用途は牌堂。



■笑意軒

桂離宮の茶屋のなかで最も新しい。畳の間が縮小しながら雁行するので土庇がだんだん深くなっていく。



■月波楼

御殿のすぐそばに配置された茶屋。盛土の上に建っているため平屋ではあるが楼の名が与えられた。



■古書院

御殿の中で最も古い。盛土の上に建っており地盤は後に増築される部分より高い。



■中書院

古書院に雁行する形で増築された。内装の設えは古書院と大きく異なる。



■楽器の間

新御殿とともに増築された。中書院と新御殿のレベル差を緩和するような繋ぎの役割を持つ。



■新御殿

増築された時代を反映しており、古書院や中書院より装飾的である。御殿の中で最も奥にありプライベート性が高く実用的なつくりである。

京都国立博物館 平成知新館



建築の配置

隣接する三十三間堂の南大門と博物館の南門の中心を通り、明治古都館と正門を結ぶ東西軸に直行する南北軸線上に、平成知新館の入り口を設けた。これにより格子状の京都の都市構造と関係づけた。

外観の設計

平成知新館の建築は、水平に長く伸びる佇まい、柱と梁の軸組みによる前面の表現、薄明かりによる採光、非対称性による構成など、日本的空間構成の根源的要素を強調する設計である。これらの設計方針によって、明治古都館の強い対称性による構成やフレンチルネッサンス様式の意匠による外観との違いを明確に表現している。

内部の構成

建築の内部は、収蔵・展示部分を中心として、外側にロビー・エントランスホール・レストランなどの休憩部分、別棟に事務・管理部分の3部分に分け、それぞれを明確に区分した。



西側から明治古都館（旧本館）を見る



1階展示室

大山崎山荘美術館 設計：安藤忠雄

<地中館「地中の宝石箱」>

大山崎山荘を美術館として再生するにあたり、地中館が増設された。周囲の景観との調和をはかるため半地下構造で設計され、円柱形の展示空間上部には植栽がほどこされている。



<山手館「夢の箱」>

睡蓮の花が咲く池のほとりに建つ、地上1階建ての山手館は、円柱形の地中館「地中の宝石箱」とは対照的に、箱形で構成されている。その昔、蘭栽培で名を馳せた大山崎山荘の温室があり、本館と山手館をつなぐガラス張りの廊下は、温室へといたる通路として使われていたもの。

